

うつわイロイロ展

～市内遺跡出土木製品～

会期：平成24年4月24日（火）～9月23日（日）

会場：熊谷市立熊谷図書館・郷土資料展示室（3階）



1 はじめに

近年、低地の遺跡調査、特に市東部の遺跡である前中西遺跡、諏訪木遺跡の調査において、河川跡と考えられる遺構から、槽や盤という木製品の容器の出土例が多く見られるようになりました。

木製品は、当然、台地や丘陵が火山灰に由来する土壌に覆われている日本の土壌の特徴から、酸化、腐朽して土壌に帰ってしまうのが普通です。このような環境下で、熊谷市の低地遺跡では、木製品を遺存させるに最適な環境の中発見される例が多々あります。

また、木製品は、その物質の性質から、廃棄され失ったもの以外に、燃料として利用されて失ったものもあると考えられることから、遺跡で発見されるケースは幸運と言っても言い過ぎではないと思われます。

江南文化財センターでは、毎年計画的に市内遺跡から出土した木製品の保存処理を実施し、後世に伝えるべき方策を採っていますが、このたびは、その成果を公開する展示として、前中西遺跡、諏訪木遺跡出土木製品の「うつわ」に焦点をあてた展示を企画いたしました。

2 前中西遺跡と諏訪木遺跡

前中西遺跡と諏訪木遺跡は、市東部の妻沼低地の自然堤防上を中心に形成された遺跡です。いずれの遺跡も、上之土地区画整理事業が行われている地区の遺跡で、諏訪木遺跡は区画整理事業区域よりさらに東へと広がる遺跡です。両遺跡は、西から東へと流れる衣川という河川の上流と下流の遺跡という位置関係（西に前中西遺跡、東に諏訪木遺跡）で、遺跡では、この衣川の旧流路とも言える河川跡が数箇所を確認されています。昔の衣川は、幾筋もの川が東西に流れ、その川によって形成された自然堤防に人々は生活し、集落や墓をつくっていたものと考えられます。

前中西遺跡は、縄文時代後期から近世に至るまでの複合遺跡です。特に、弥生時代中期から後期（今から約2,100年前～1,900年前）には、大規模な集落が展開した遺跡として注目されています。

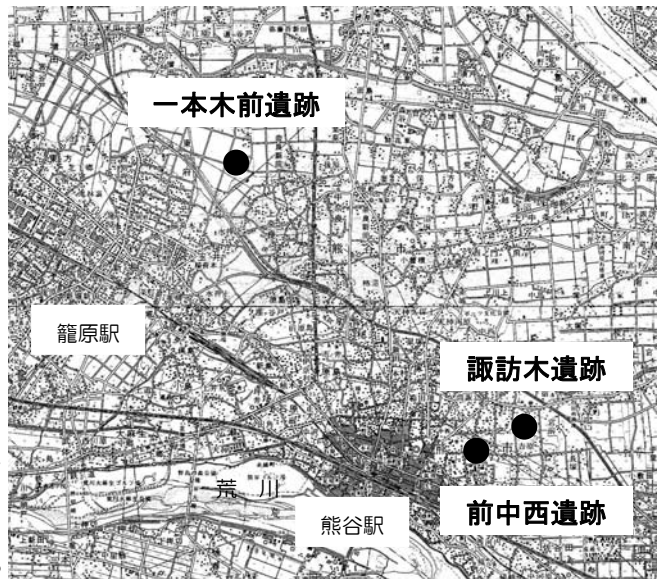
遺跡内で発見された数箇所の河川跡からは、弥生時代から平安時代までの土器などと共に、木製品も多数出土しています。その木製品の中に、槽や盤といううつわが見られます。

諏訪木遺跡は、前中西遺跡と同様に、衣川の旧流路である河川跡が発見

され、ここで行われた主に古墳時代後期から平安時代にかけての水辺の祭祀にかかわる遺物が出土し、古墳時代から奈良時代以降の律令時代へと、祭祀の形態が変化していった様子が推定された遺跡です。

また、河川跡の両岸に形成された律令時代の集落は、一般集落とは異なる官衙的要素（役所等の性格）をもつ特殊な集落であると考えられている遺跡でも注目されています。

河川跡からは、多数の木製品が出土し、その中には槽のほか、柄杓、皿、曲物、漆碗といった多種多様なうつわが見られます。



展示遺跡位置図

3 木製「うつわ」の種類と変遷

木製のうつわには、くりもの 刮物、ひきもの 挽物、さしもの 指物、まげもの 曲物、ゆいもの 結物の5種があります。

刮物は、手斧などの道具を使って、木を刮り抜き、形を整えた器です。

挽物は、おおまかな形を作ってから、木工用ロク口を使って、回転させながら形を整えた器です。

指物は、板材をホゾや釘などで組み立てた箱形の器です。

曲物は、うすく割り裂いた板を筒状に曲げ、底板をつけた器です。

結物は、桶や樽などのように、短冊状の板材を底板の周りに並べ、タガで締めた器です。

また、木製のうつわの変遷は、へんせん おおむね次のとおりです。

縄文時代や弥生時代は、刮物が主体で、弥生時代には縄文時代に比べると器種が多彩になります。

次の古墳時代は、前期までは弥生時代の器の伝統が色濃く残ります。中期は出土例が少なく、詳細は今のところ不明です。後期になると、曲物が登場し、曲物自体は8世紀以降広く普及することになります。

奈良時代～平安時代には、曲物・挽物が普及し、9世紀までは器の種類の中で木器は皿が多くを占めます。これは、土器の器種を補完しているものと考えられます。10世紀以降は、碗が増えていきます。平安時代後期の11世紀以降には、木器の需要が増大し、普及型の漆器が生産されるようになります。

中世・近世には、漆器類の普及が一層進みます。また、結物は、中世に普及が始まります。

4 木製品の保存

木製品が遺存する理由としては、水が豊富に存在し、その水に浸かっていることにより酸素の供給が極めて少なく虫やカビが繁殖できず、これらの害から守られてきたことが挙げられます。つまり、湿度が高く温暖な所では、虫やカビ、菌などが繁殖し、木（木製品）は腐りやすいため残存しにくいということです。そのため、遺跡から出土した木製品は、保存処理が不可欠なものとなります。

木製品は、調査により地中から出土し一旦空気に触れると、その瞬間から劣化が始まり、乾燥により、木材の内部にあった水分が失われ、著しく収縮してしまいます。このような現象が起こるのは、木製品が地中にある間に、木材の化学組成であるセルロースとリグニンという成分が地下水などの影響を受け、徐々に加水分解や酸化などの化学変化を受け、分解し消失するからです。

したがって、木製品の保存には、早急な保存処理が必要になってきます。

5 展示品の木製うつわ

前中西遺跡の河川跡では、槽や盤が、おおむね弥生時代後期から古墳時代前期の地層から出土しています。また、諏訪木遺跡の河川跡では、古墳時代後期から平安時代までの、柄杓、槽、曲物、皿、漆碗が出土しているほか、江戸時代の漆碗が出土しています。

柄杓は、水などをすくうための道具で、柄がついた器状をしています。展示した柄杓は、柄に対してすくうための身が肉厚に作られていますので、製作途中の未成品か、実用品ではなく祭祀にかかわる道具の可能性が考えられます。

槽・盤は、平面方形または楕円形の浅い容器をいい、区別は必ずしも明確ではありませんが、やや深めのものを槽といいます。槽・盤は、弥生・古墳時代を通じて一般的です。展示した槽には、短辺に把手の付くものがあります。

曲物は、うす板を円筒状に曲げ側板とし、これに蓋板または底板を接合した容器です。側板と底板（蓋板）の結合には、樺皮結合と釘結合があり、古墳時代の曲物は樺皮結合が主流で、奈良時代以降は釘結合が主流であったと考えられます。展示した曲物の底板は、古墳時代後期のものが樺皮結合、奈良時代～平安時代のものが釘結合です。

皿は、当時使われていた土器の器種を補う器と考えられます。伐採した

木から木取りをして、ロクロを使い挽いて製品にします。展示の皿は、不明な1点を除き全てトチノキです。また、底の外面に「木」の焼印が押されているものが見られます。

椀は、皿と同様にロクロを使い整形しますが、ロクロ仕上げの状態での加工を終了する「白木作り」と、ロクロ仕上げののち漆をかけた「漆器」があります。展示した椀は全て漆器ですが、奈良時代～平安時代の漆器の大半は、内外面とも黒漆をかけますが、時代が下るにしたがい朱漆塗りが増加する傾向にあります。



前中西遺跡盤出土状況



前中西遺跡盤出土状況



諏訪木遺跡柄杓出土状況



諏訪木遺跡槽出土状況



諏訪木遺跡皿出土状況



諏訪木遺跡皿・土器出土状況

平成24年4月24日発行

編集・発行：熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係）

「うつわイロイロ展」展示品リスト

1	盤	弥生時代後期～古墳時代前期	前中西遺跡	
2	盤	古墳時代前期	前中西遺跡	
3	柄杓	古墳時代後期	諏訪木遺跡	市指定
4	槽	古墳時代後期	諏訪木遺跡	
5	槽（把手付）	古墳時代後期	諏訪木遺跡	市指定
6	槽（把手付）	古墳時代後期	諏訪木遺跡	市指定
7	槽	古墳時代後期	諏訪木遺跡	
8	槽	平安時代か	諏訪木遺跡	
9	槽	古墳時代後期	諏訪木遺跡	
10	皿	平安時代	諏訪木遺跡	
11	皿（焼印「木」）	平安時代	諏訪木遺跡	市指定
12	皿	平安時代	諏訪木遺跡	
13	皿	平安時代	諏訪木遺跡	
14	曲物	奈良～平安時代	諏訪木遺跡	
15	曲物	古墳時代後期	諏訪木遺跡	市指定
16	曲物	古墳時代後期	諏訪木遺跡	
17	漆椀	時期不明（平安時代か）	諏訪木遺跡	
18	漆椀	江戸時代	諏訪木遺跡	
19	漆椀	江戸時代	諏訪木遺跡	
20	土師器槽形土器	古墳時代後期	一本木前遺跡	

※ 番号は、展示の題箋に一致します。